



大可談

古今

ソノ昔子張

三

遠
2.067
4



門へ 13
部 2067
巻 4

古今奇談英草紙第三卷

⑤ 他任重法詞より浄敬と断る話

世の中事何れも天命なり能くすべし命の行はるるは神と告ぐことあり
承て自知り知る命の行はるるは神と告ぐことあり
ぞと知る事一も身立ちて是れ法論と云ふなり
果して此世の宿業因縁ありやと指し示すと懐く一箇
子法安年中後宇多天皇の時と紀の伝をあるもの有り
物語して一月十日と傳はれはるる家の業ありきれば
意の宿業と格の圓の凡の如くは秋の夜も又隣りてはるる
いづれの朝りくはるる時傳の精士として傳ふと云ふ
世の中家業を継ぎ親を孝順にして是れ伝はるる長き
世の家業を承く才何れも有るる傳はるるはるる



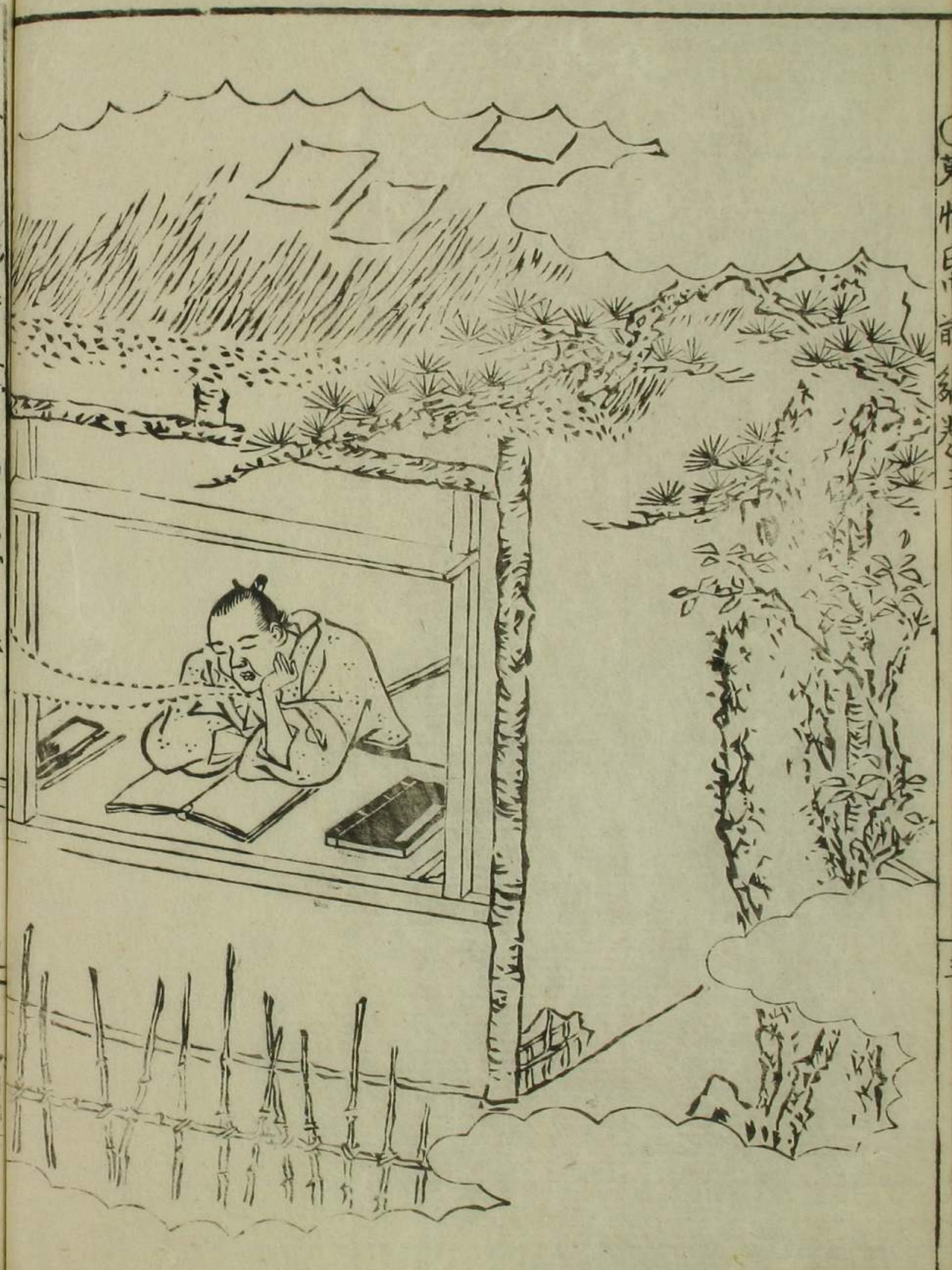
古今奇談英草紙第三卷

自みゆふよ撫と折ぬも藪とらうし准美人の目よえきり
 蹴拵人ありと近隣ハ尊ひりりて平教の綴物もあかこち
 勝り身りて終よ口版り充るほらねらぶと吐息ひらねるも
 霧りり居せんひささう困窮く書を清と清家の体光は授て
 目と送る厚より大見威ありておとあふ高村小條家の横澤と之
 うらやうらふん云命改し幸経あまうと何と素く若葉軍公籍
 子眼とまじし三軍の指揮も略つね是と成せども年久すと
 るくも室く少衆の修りとも常り軍機とて是るもな
 くらよと懐くそ森お一海とあはれと素とり日
 天才あふ人と生じて又是は巻用の人と生ぜん日西はれ
 多し一少影いり深くうづとれ彼れと若肥馬り
 誇らんを胸り一物あけきても素は餘る賞ありあふん
 雲りけりるを素を涙よりの笑恩あるも後と願倒るる天道
 私かーといとんや

むきしゆやりども秋のそぞなきいりあふ風のありぬる所ん
 書しあがりて喉どるる子叔及依情をば又右射一章と題き
 蘭草自然香 生於大道傍 腰鎌八九月 共在東薪中
 多しと想を素く煙ちとゆて詩飲と焚烟とあふと之れらぬ
 何るまじと天幸初らうあはれ親り親して言何る魚うら
 想少よ素釋ハもさうふなして富の親王として刑花とまじむ
 一言は素所もく史無とまじし因果よふく生と活一むと裁
 判にふあうざらののよとあふ我生ゆ教直とあふ富屋とあふと地
 着の決断と成さうめと善悪理非論被掃と須とて明白
 せしと福り素しとれり倚て胸る忽見る七八個のまむ條

一。鬼卒机入り下より傍を、任事と睥睨你いつん升り方なりて
 天と怒る地とをむ今你とてとて圖魔王の面をり還去りて
 你まじと聞かむをまずふらん任事改と考て你が宿君公の
 らん作て友人の誘殺と控むや環魂一掃り帝より多しと批
 評し批言に意なき子とみく任事頭を奪しそ捕りては是れ
 任事怒りと嘲して焚りて焚くは成お経非體系て天上
 の帝は宣しは玉帝大は怒りあひ世人の爵位を奪五ハ氣
 運の急るるゆる不被がら芳結とく興あるとのと後はおり
 たりの下流より切り刀のつもの顔、才なきもの遊、女女の間
 天下世に在る世の中は星北は倫し一彼若ん減、廣がに初て
 天とむく連り飛と回て前後の儼とと一何は太白金星、
 して其他の任事言集にこれありとて、いひ人月もくして

寔抑鬱、少ありとて、いふ海より善は福一、善は福一、いふれ、
 理あり彼が言を帝はとせ、玉帝宣ふ彼有、傷若福にむし、
 降つて刑恥と更んことと、いふ、いふ、いふ、いふ、
 今さう、穢とんや、陰司業、勝山、結とく、十殿の、
 睥睨、わん、波、去、何の、中より、一、い、い、
 養、一、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 見、る、り、果、し、て、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 決、せ、ざ、る、と、の、あ、り、て、地、獄、中、の、怒、乱、立、升、て、
 下、傷、の、何、れ、任、事、を、陰、司、に、列、ら、し、地、獄、り、
 終、り、め、陰、司、の、受、刑、公、子、彼、を、し、て、
 胸、の、切、を、め、く、罪、を、怒、一、公、の、
 彼、が、知、た、は、腹、を、割、り、玉、帝、善、を、
 准、ひ、而、合、身、と、陰、司、子、



○ 讀書日 前 錄 卷 三

7 同君は幸しと任重とと人跡止め推し王位の中を備へ
 只一重の附とくさるる程より云ふと程敵と決せしめ決らざる
 あらふ破来世極富極盛今生抑替り若し弱し備前同の才なき
 とは郡郡地獄り陰して永く人鬼得まじむす一の歎道
 高き天角を畏りて所て子無常小鬼と考して任まじと句て
 地府より西しむ但ま小鬼子捕れず憎むとせぬく憂ひ程あり
 邪る時小鬼躍つけと鳴と任を回ふと面りやとさるは人より
 我は魂とふち右の老回をさふら百多を子之任を去よ毒
 中て不我圖ま新面して胸の中は懐りとむと與ふ事久し
 大主御座尊くた右の傍判度多くみ先次万馬たり我は軍
 もし子治ありと奴王威勢とみく塵りともあふんまを極し
 理は勝若と法とせし一高云寡人亦く治司のまことあり凡の
 事皆天より傳く執りし何程の徳能ありて我は後よりこまを
 何ものと交ふとと執りしや任まじ云你若も天の命を
 道を所と況けたるならんともむとさるは善くは
 勤め悪と懲とと公とんか今世の中より善悪と并ん
 櫻香ゆして櫻と結とさ知れ軍は別後で山はさるは又
 絶とあり善とさると善とさるは中室令刻落しと人さる
 とさるとさるは善とさるの位はあり善と悪とさるは忠厚と人
 校おりの世瓜後く善して其れと善げは善人悪人
 初階れ月所るとは善力の善は聖法が寛らつと誰か
 屋せしとそ伸る事あり一皆圖君の刻影画しかさるは善
 離り後り八折と種し月此後の少年はさるは善人悪人
 若くは天道報悪運とと運まことめあつとさるは勝まがわくこと

小鬼齊く難治しとて有るよしを之の任重次子天子冠と戴き
 兼り降夜と穿ら臘小玉帯と事縁あり玉帯と執り
 所より小玉帯を扱て昇物とて屏風後よりめりあぐ
 法衣より升る流自更率冬綵已り畢つて奥宮更率
 より帝トて改し給告牌と掛くと候る所任重次子
 此後より動る万國の生靈及び等より取ある所の
 洞窟の者も信ざるの我之能く是て惡と爲し
 ところ告と候るより是れ是との告物の内疑難なる事
 所つて決せざるものわら寡人刑部して改日比橋様子海
 へし利夏置よるやと与膳部別々華原後多相帝文治建
 久の比より今よりあつて高決りゆぶらる通の告物
 澤より一宮より任重次子著所

知と期て令へ水告事

吉人 南膳部川日本國養和文の主言仁

被告 同邦同國平氏備盛妻二位尼

功と其の青肉と傷と告事

告人 南膳部川日本國源姓

被告 同邦同國源將軍 其臣 絶り 義経 頼朝 實元

功と其の青肉と傷と告事

告人 南膳部川日本國 畠山氏 重忠

被告 同邦同國 水條 時政 其子

任重次子天子冠と戴き兼り降夜と穿ら臘小玉帯と事縁あり玉帯と執り

男して法司決部歸りし所は也今お如く判じし一し明白
ありし乙と直名の親率と呼んで二通の若婦と一齊り喚び
しの際若被告挨拶よりあはびて懸案判官高聲に原告被
告の事と叫ぶ

貴人 安徳君 在也

僅て回答し置

被告 二位 厄 在也

僅て回答し置

任事初と用て二位厄ハ印を小御て共に入水せし(悪心といふさま)世所
をいふお徳君所て去朕平氏より身獲せしれ西海よりなりお氏親ひ
盡く一親海より没せしる所朕が威に平氏なりしをいふく事
ほせし身あき足兵のまよは返りしれとも命あめでさうらんは二位の厄
腰より突ぬと帯し梅案の盾より腰と抱しめ水は屋よりあは
しはしあしとつひく海に入りてたまたまあき腰とこが死の連

せしハ何ぞぞあまうて後ハ世の後り朕母関門院ハ内は後ハ人
の女ありとくともあはく又帯の世目からさうしは見字書とて
ておししとる腰ありと子あきとて我と京登は船とせしハ海
の腰よせし事して入水せしめとる罪を悔せしる殿は具足は者
し御座りうおしとる事とてさ書の家終る若衆と見くお氏の和
と掩乙とあ拿張法橋がみあきといひのしも是より同トらさ
け寛屋と伸て湯屋し任事去本徳君の女に一つおしりあり二位厄
若くは河をうらむ我相あは外感法堂の律ハいして安徳君の
お氏あきとほしあはくし男室の格處し七位より那さるものあ
人もは後しあはくし女伴あはつてお氏の罪をく後世は後論と
おはしてさうくお氏を河あきとる人我とてさうは若く
ひとくお氏し次し無し

若人のつらき事うつらさや

儘で同好よし

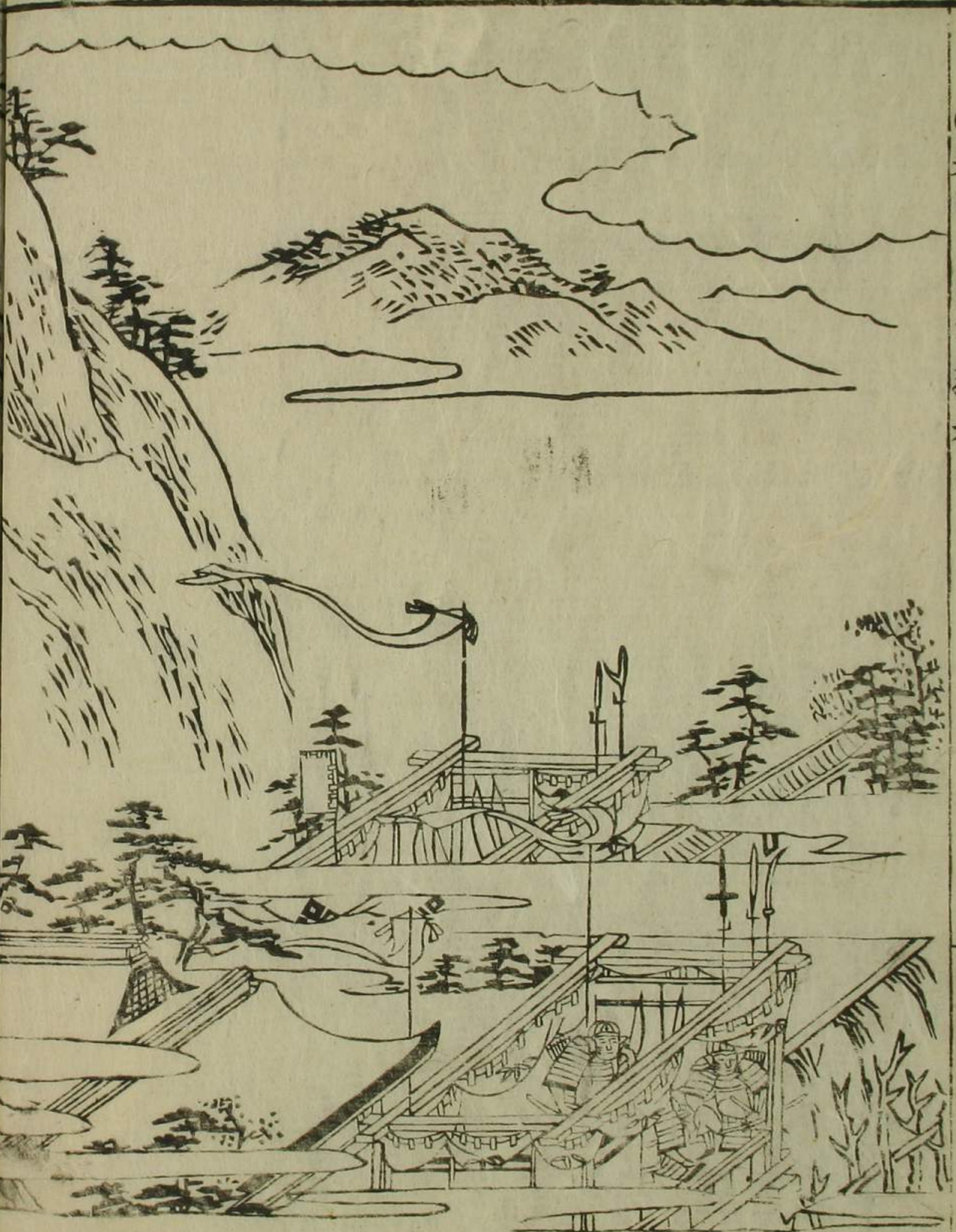
報告 うちとも切ありとちや

儘で同好よし

任事云義経が若く前代うあやとさても休就久人種とまりしに
 主敵の判官よりめ父頼朝は降せし先達を信守りしむ
 信より頼朝の事と告りし時効と云くよるが自認して困れと
 あり頼朝も急ぐ程と西海せば頼朝何ぞ急ぎの情と想ふら
 ぬさあまらうと上使去任正俊と斬て謀叛人の志と願一云きうて
 一流りゆさる世と同様より頼朝とせしな平氏とぬえしときら
 て後よお遠しそり来と知らぬきう果終りと志都りか合ふま
 ちて若くは所へ出さへいふ義経やて云あられ所あ某が若る交一
 種より終るべし某合見と受服とさども父の骨肉は物きあ
 奥取り時と信大庭師の陣あせり又又あてりり久の代友と

して範れと偶り 園外の枝をさざり 義経とに湖よりさりし
 しきまお成と西海は斬沈め家のぬと討ら 園のぬと同く
 都り 在判して危少と信とえうり 業と無との百あふ六
 の海と信と信とち平と業し 信は武徳の脚とありて云ト
 と 巖石のあさにかしとあひの介久の心挫く 越道補使よしと
 脚しと軍と云れ日も腰斬り全進し 地をん高も大江原之権
 京京事より言を種て去任正俊と斬よ業せ 刺高は信しと云
 じん道く我あかり 投へらりしよ某一時の横怒りまうてと信
 と判りそりうのく鎌合アうり 取自よ大軍のむる信守らまこ
 毛まであ方と母の信守の目も義経敵と知りしと云
 我と見しそり路と人のいしく 我は從者以外は時方かきと云よ

文治元年十一月二十日、都を築き、河原川に居りて、
 多田原氏より、とて、通とて、通とて、通とて、
 て大物好満より、河原川に居りて、
 あれ、とて、出帆の海より、とて、
 及、とて、川より、とて、
 有、とて、
 と、とて、
 多、とて、
 捕、とて、
 の、とて、
 と、とて、
 氏、とて、
 う、とて、
 秀、とて、
 み、とて、
 敵、とて、
 ど、とて、
 か、とて、
 新、とて、
 の、とて、
 わ、とて、
 去、とて、
 か、とて、



義経生れ性急うしてくまに親むる体く己と修まんと愛し
 そのの辨あり是なり人の心は測り難く其の威勢は善く
 りしと慮り細心の計りて母を福よ進りてお田島山に海河の
 家能程守忠を將領と才親とを親守ともあしぬ人柄ありてお
 うまうと睦愛しゆ人権原景時ハ侍別高入所司軍士の首にして
 武勇りの名人ありて大小の事皆承り合せぬ本質及付よの
 時一族との合戦しゆいさし進み心とぬと武勇りゆれあり一
 夜も静退しぬあどいさし進み心とぬと武勇りゆれあり一
 さく其の二羊を駕射はほせり時使者と操りし進して其
 方ね馬か射し任せし使ハ宣言とあしりPと其の武勇
 甚だしいなり使志す射して作らるハ能く義経承りぬ我
 より内養を以て受給せりと吹巻せし能たも進し一放りゆり

極る子細ありて未其妙はりるがれあり承りて西
 ころあど一是とて日法の之徳思ひやるとも怒り初り
 何れつる時大に度之頼朝ハ後ま在りて夢と信之云平家
 未西海り在て新卒すくはと懐けまんと其の徳あり
 小事と怒りありて四と計りて頼朝子く懐り言と概述て
 見もまきりて進り任友と進めりハ内も頼朝を忠勤
 と思ひての事ありとるもあはて徳と云ふりて
 是より派頼朝の体みふり我亦その船一計と云て云上
 後白河院頼朝が権威と云ふ事忘りて其の徳あり進
 け空の計けいと進りて其と云ふ事ありと云と守ぬれ
 とも西海の権籍と進め其の所氣色ありかたぬと云事あり
 ざらぬさふりて其の徳ありと云事と進て

中途より入る路りそれごとくははれり川を絶り任せて義経
 が向ふ所ある處に河を渡りて義経に余童歌の時流るるを思
 法眼とてそののりて深く陸揚の地を望み備く軍務の奥
 と後心人相と交るる事秘かに名ありて彼が相を求むるの
 市となりて果て来と相して来七十一歳功名榮きり流りと
 あり是れはよふははれは伊せそ人の心は候へん流りし君は
 義経より年二十一歳彼一宿衛とて験るく虚名よ素して
 人と候し人の一とあやまる恨屋し〜任を鬼一と喚で是れ
 同く鬼一云人れ来命延慮とあり折屋あり早学共流り
 来命の定難とて是れあり義経七十一歳是れ其上の理の極と
 ありきりか彼が機と殺しを深く陸揚と極するり多きか
 絶折とて其れ果て天下の遠くは此れを任す云義経幾件陸揚と
 極して云候し鬼一云始義経奥州へ志し陸の防員日入
 下那の信人深宿渡に交りて同様の物なり〜其れは合人
 橋次と交りて首運して之河の必死候とて十日計候とて
 交りて合人〜心宿の長が娘とて〜一服秘の整りとて交
 交りて下那と若しと深橋の飯り〜年計ある月波共あり
 あり候とて〜思ひとりて殺し消息と送ると〜も義経
 平風とて世に河の音とて小ありあるは一節なるか〜は深く
 懐りて其れ年のつらむあり〜なる実候〜つらふ〜春十
 年と折く〜壇の角平軍敗き〜後女院の御願り〜余舎りて
 回母と犯し〜なり又十年と折く〜其れ西義と云〜却て久
 と過すの院宣と〜ヤと先り〜又十年と折く〜將家の
 者あり〜免さるる事〜義仲退治り〜流り〜と殺す

歳ふ万と云ふべ又十と云と極む 併て四十年の壽命を以て
 うつて割るは義経を大に廣えへも其武徳の所範として都魯
 へ流るは彼先王の及り流るるなり寸ある所として同胞の万に
 傷や何事かを任ず廣えと嘆かして同く時廣えを来きし時
 形相のお天下の所のけりと思ふて義経のおりせん彼延尉朝日
 將軍と號し平氏とハ名けりはるるを方好果を以て切と云ふ
 るの事ある延尉の英武よりんせんは惟りく及ん我其時より
 延尉ハ徳あり必も切と武闘は僅つて自驕るるをせんしたる
 時をて解も亦ある處と思ひざりき跋扈の御止事く不慮
 ありありハ軒外は虎と云ふたたく頼朝一代忠と云ふんも子孫
 重く徳ありんて唯唯との稱と此あり其後ハ事入て
 人極むわぬ一はも梶原景季の堀川の事より引て行家進討り
 ると述べて是と云ふは其功徳を計るるなりは再叙するに
 附和して物も極むといひあつて意符甚く遠ありしを京季え
 ろう小人あれども是と懐り武徳の所範ありて流るるありし
 残事ありんて是と知りあつて毒ある後人と云ふて是と懐く
 かく却て其心は逆も是皆老成ありし方の後とあり任まらば
 義経の函へて必責者ありて其功の飛あり頼朝若くは河原
 へて廣えも其後ハ其智を以て極く頼朝の徳を述めざるを飛
 ろしと云ふは其源氏再興義経の命令と極く方切なりして
 貴がべきの事ありんて其義経流るる所は定と報せしと事
 写し一書よひんて又範形と云ふる吉と極範形云来統
 寸あるも是の代官として義経と悞りし海よりなり年終と
 白く頼朝の遺徳捕使若我輩の力あり飛り思ひん若く同く

歳ふ万と云ふべ又十と云と極む 併て四十年の壽命を以て
 うつて割るは義経を大に廣えへも其武徳の所範として都魯
 へ流るは彼先王の及り流るるなり寸ある所として同胞の万に
 傷や何事かを任ず廣えと嘆かして同く時廣えを来きし時
 形相のお天下の所のけりと思ふて義経のおりせん彼延尉朝日
 將軍と號し平氏とハ名けりはるるを方好果を以て切と云ふ
 るの事ある延尉の英武よりんせんは惟りく及ん我其時より
 延尉ハ徳あり必も切と武闘は僅つて自驕るるをせんしたる
 時をて解も亦ある處と思ひざりき跋扈の御止事く不慮
 ありありハ軒外は虎と云ふたたく頼朝一代忠と云ふんも子孫
 重く徳ありんて唯唯との稱と此あり其後ハ事入て
 人極むわぬ一はも梶原景季の堀川の事より引て行家進討り
 ると述べて是と云ふは其功徳を計るるなりは再叙するに
 附和して物も極むといひあつて意符甚く遠ありしを京季え
 ろう小人あれども是と懐り武徳の所範ありて流るるありし
 残事ありんて是と知りあつて毒ある後人と云ふて是と懐く
 かく却て其心は逆も是皆老成ありし方の後とあり任まらば
 義経の函へて必責者ありて其功の飛あり頼朝若くは河原
 へて廣えも其後ハ其智を以て極く頼朝の徳を述めざるを飛
 ろしと云ふは其源氏再興義経の命令と極く方切なりして
 貴がべきの事ありんて其義経流るる所は定と報せしと事
 写し一書よひんて又範形と云ふる吉と極範形云来統
 寸あるも是の代官として義経と悞りし海よりなり年終と
 白く頼朝の遺徳捕使若我輩の力あり飛り思ひん若く同く

戯るくへ者あり女の男り戯るくへ理の者ありは忠義傳子
 人々をえく一時はあはれと新し戯る言とあし我れをえく
 走ゆりぬけあり一語後言と托して其れの最と回ひしを忠
 云我れはあしはれとせよと殺万何と仰し大慶堂に食部衣
 西原の者色後堂に元何れをせ候の老翁と慕つてや彼れを
 文見伊豆の流人よ兼隆が轉てきて既り定つては又支なり
 ながく父時政が在青のるちは月依處り家通くろが時政必
 して其れと知りお彼れの中へと候り直り中本が件へ送りつう
 一及兼隆の件へ候しされども依處のるちと志せうて中本の彼と
 逃出く依處は後心の探定らざる半かくのくしを忠知るるを
 人々と候人へ道れ大概と知る其儀の志は後程もかり任する
 き忠し不真情致ふが河をぬり候しとあはれ必しと言ふるは
 言忠ハ大町の長忠前比敷ふし是若山濠があはれり謀り後代

水濠の上下とゆくそのふ方ち候ふ人々其て生か汗馬の首
 了被ゆへに任する若忠の女刺支と候て世傳抄へしめ決り
 明日恩を思ひて轉ひ候へ候とゆく轉ひ分毫と候へんを
 連告の若までも一場子あ若せし知ん何州何郡何郷何屋
 惟幾時生れ幾時死し細くと池添して罪人一死は去てまの
 願は授せしむぐし刺反骨と把て任するの言をよはて世傳抄
 若しとる任を云安西君ハ日本國公卿何郡公廉の者も托し
 して廉子と稱し希統とゆて唯所よるり後本朝の國母
 とあぶしとて業園と引て義貞復良があはれ害をせんこと
 有る二位の尼ハ是も西園寺家も托しし實業の女とてし家の
 先例よりのて入内して所よるるも廉子よ龍と集りれ

秋しく希と観るくくを好む國龜龍願空く深宮より切りぬらん
為人命は悲愴よりくることあるべし是を以て安徳君の教と雖も
一む義経你身命と情まはぬの恨とけり君の教徳とあんど
切方ありて志と好む物色ともあはれの新羅多く陰徳を換む
る事ありて恨と教して日中上野國信人新田古部朝貞が家よ
生を托して義貞と名なり高氏と修よ鎌倉と亡ゆしてち下
と分々の勢あり後醍醐君よあつて終りを能せざるへあはれ
鬼の執事高範光又切あれも彩より身世甚恨と結せしむ御
新平治の如くの手事と見よ征西の時你とわとあり義経副將
あり副將を一急事ありぬ毎度計策とは中進ども你とわの計
なく却て義経が軍慮の妨とあはれ半多く却て義経を好む
むより新田よりあはれ甚し一唐亡きハ高寒き事とあはれ義経が

雲をよきと今む死のあはれ今你と國邦の國棟正遠
家よせしめて幼名多門丸後多門之傳正成と名なり後醍醐帝よ
頼まれ高氏義貞とせよ少條家と亡し一皮帝と母よ出むり
攝河のりよ振うて新田足利と之門の勢とあせども前生よわの
かあさ身としてま任はあはれとあつらふくは思てよわを
あはれとありあはれは後生義貞のトリ湖を彼が命と徳て才
育あつる自色の神機妙算と仲る事あはれハざりむを忠々你
是武文二氏の君子切らて罷ふし一你と下那の必足利後攻守
貞氏が家よわをせよの高氏と名あり少條家の徳とあはれ機と
思く志と愛し少條よ教て官軍より加わり新田とまをわとあつ
後醍醐海と一統とあはれよわは忠忠と教むく守忠云少條家の
徳者とあはれ万一彼が脅盡る時志と愛とあはれ一却ぬとあり

何れもその思ひ消去士あつて、任事云積載人の智考をせしめて、
 卿一史に江田海に前生の智測と依高し、忠と同一腹に托
 其責よし、直義と名のり、父のおよそちり、計策と合ふ
 或い道れ或い進み、父身内候して、肝直と儲り、また、皆修ぬ、
 ひくく、又吉忠、鬼一ハ義行と相して、七十一早業、たよ、修り、と若と
 色も、義行、共二十一年、波、法、瀧、と折く、中、あり、も、是、お、令、中
 乙、も、ま、さ、り、あり、你、が、御、の、不、慮、あり、よう、今、你、と、高、潔、の、一、義、
 平、と、托、一、肝、直、と、名、め、り、之、利、家、の、控、柄、と、概、り、返、自、天、下、と、定、め
 軍、一、早、業、あり、て、刀、下、の、鬼、と、なり、法、湯、毒、ト、相、人、の、御、と、い、ふ、と
 運、口、と、明、言、の、罪、と、被、り、し、政、と、結、法、を、胎、し、て、も、凶、死、と、死、れ
 ざら、い、希、業、の、あ、り、而、時、政、作、と、再、い、し、條、人、ま、あ、り、入、り、て、平、貞、時、
 賜、ふ、と、生、せ、し、め、為、時、と、名、あり、礼、と、ま、世、と、降、て、如、と、号、し、
 終、り、條、念、ふ、て、七、さ、り、希、世、切、口、と、傳、り、彩、と、ま、ら、う、て、
 ま、で、七、さ、り、政、子、你、を、仲、清、海、家、肝、親、の、家、に、投、胎、し、て、後、院、
 親、の、宮、女、と、し、氏、於、け、の、局、と、号、し、大、塔、乃、宮、の、母、堂、と、て、其、身、
 一、度、帝、の、寵、幸、と、亦、あ、り、ま、が、う、一、生、ま、と、ゆ、と、南、山、と、号、し、て、
 宮、自、義、子、被、せ、れ、あ、り、て、後、憂、り、況、と、て、世、と、あ、り、是、高、氏、が
 彩、よ、か、る、希、忠、と、傳、り、彩、と、被、法、被、く、と、唐、元、ハ、同、邦、播、磨、國、
 赤、松、河、某、の、家、に、生、れ、し、め、法、号、暗、心、と、号、楠、子、法、で、官、軍、
 切、と、い、ふ、と、法、世、の、後、貴、せ、し、ま、ん、之、の、作、用、一、郡、と、御、任、示、し、河、
 せ、う、ま、り、て、切、骨、の、甲、州、あ、り、ま、り、御、一、彩、彩、你、宿、善、ま、り、て、自、身、の
 惣、進、捕、使、と、あり、家、と、興、と、し、て、ま、た、と、夜、渡、宮、人、と、容、り、ま、り、
 と、ま、ん、二、人、の、彩、が、海、へ、寄、你、が、罷、あり、今、你、と、氏、於、け、三、位、后、の、腹、に
 投、じ、て、五、子、と、生、れ、ま、り、外、殿、候、が、あ、り、ま、り、ま、り、天、台、の、彩、と

何れもその思ひ消去士あつて、任事云積載人の智考をせしめて、
 卿一史に江田海に前生の智測と依高し、忠と同一腹に托
 其責よし、直義と名のり、父のおよそちり、計策と合ふ
 或い道れ或い進み、父身内候して、肝直と儲り、また、皆修ぬ、
 ひくく、又吉忠、鬼一ハ義行と相して、七十一早業、たよ、修り、と若と
 色も、義行、共二十一年、波、法、瀧、と折く、中、あり、も、是、お、令、中
 乙、も、ま、さ、り、あり、你、が、御、の、不、慮、あり、よう、今、你、と、高、潔、の、一、義、
 平、と、托、一、肝、直、と、名、め、り、之、利、家、の、控、柄、と、概、り、返、自、天、下、と、定、め
 軍、一、早、業、あり、て、刀、下、の、鬼、と、なり、法、湯、毒、ト、相、人、の、御、と、い、ふ、と
 運、口、と、明、言、の、罪、と、被、り、し、政、と、結、法、を、胎、し、て、も、凶、死、と、死、れ
 ざら、い、希、業、の、あ、り、而、時、政、作、と、再、い、し、條、人、ま、あ、り、入、り、て、平、貞、時、
 賜、ふ、と、生、せ、し、め、為、時、と、名、あり、礼、と、ま、世、と、降、て、如、と、号、し、
 終、り、條、念、ふ、て、七、さ、り、希、世、切、口、と、傳、り、彩、と、ま、ら、う、て、
 ま、で、七、さ、り、政、子、你、を、仲、清、海、家、肝、親、の、家、に、投、胎、し、て、後、院、
 親、の、宮、女、と、し、氏、於、け、の、局、と、号、し、大、塔、乃、宮、の、母、堂、と、て、其、身、
 一、度、帝、の、寵、幸、と、亦、あ、り、ま、が、う、一、生、ま、と、ゆ、と、南、山、と、号、し、て、
 宮、自、義、子、被、せ、れ、あ、り、て、後、憂、り、況、と、て、世、と、あ、り、是、高、氏、が
 彩、よ、か、る、希、忠、と、傳、り、彩、と、被、法、被、く、と、唐、元、ハ、同、邦、播、磨、國、
 赤、松、河、某、の、家、に、生、れ、し、め、法、号、暗、心、と、号、楠、子、法、で、官、軍、
 切、と、い、ふ、と、法、世、の、後、貴、せ、し、ま、ん、之、の、作、用、一、郡、と、御、任、示、し、河、
 せ、う、ま、り、て、切、骨、の、甲、州、あ、り、ま、り、御、一、彩、彩、你、宿、善、ま、り、て、自、身、の
 惣、進、捕、使、と、あり、家、と、興、と、し、て、ま、た、と、夜、渡、宮、人、と、容、り、ま、り、
 と、ま、ん、二、人、の、彩、が、海、へ、寄、你、が、罷、あり、今、你、と、氏、於、け、三、位、后、の、腹、に
 投、じ、て、五、子、と、生、れ、ま、り、外、殿、候、が、あ、り、ま、り、ま、り、天、台、の、彩、と



英州府前編卷之三

あり三子の死と愛れし法地と申す所はこれなりとも
 遺俗して獲るるなり父帝の志は法にても小隊家の格
 り政を治するなり紀の降し遠くして少鷹石取思ひ
 て後征夷大將軍小あり也といひて言ひて云下と梅
 下は繫ぐれ直義が命して御意がぬき首と切る
 梅あり三通の歩は悉く着しと罷せしむるも
 皆屈服しと任を鬼率に命して云今此一場の
 同邦は征する世ども無報のありともあれ
 今年も残すむべしと云下と梅下は繫ぐれ直義
 かくれ任を判りぬゆき畢りれば衣友人心服
 了細は任しと云下と梅下は繫ぐれ直義
 と知し高の海人候とあり決りて云下と梅下は

情と富に主嘆服して世の中と云下と梅下は
 百年の御難彼若六時の方より決りて云下と梅下は
 御下と梅下の奇刃は任を云下と梅下は
 抑してめし過らぬ世彼と新田義貞の身は
 久の職と罷て菊羽の片とあり志を得る
 報りありは月學といひて轉生する若かれは
 ことと云下と梅下は
 備して任を云下と梅下は
 後と云下と梅下は
 五郎の氣は云下と梅下は
 後と云下と梅下は
 後と云下と梅下は

有人と燃其の面ありて一其の根根小くせしめあてつふる其等
 云你情儀の智気と懐くさるわいし人界子と世人と三其のつ小
 その程とあど極樂へ天考とも云人ノ根をぬのおよ喉どして火盡
 烟とありて空り升り了る音と物不消化して天の空あると候は空と
 ちつて世にとまづさ物あると極樂とも浄土の中界とも不悟信
 然空と現世より願しつるものこそ其のつるあは道しつる
 人も亦おしづらんどもかかり存もあく痛果ると馳て候勝よ
 ある末世の存身無事と事不思ひとりてたらくねく多き世に
 了る人も人界へ生さるもくば後び眉と深く幸もあると一と強
 小くしと起さんとも事の不便がりて佛菩薩の名を詢へて
 九品に浄土と没て是と形と到る處と定められつると其の被
 佛の運ふことありて空と一つは消滅するるとあはさる候言を

撥る過て身をさるりつるあはよやく地着小候と身は随地
 生さる程て其心執意と教へ解脱して去るなりけるあり又
 形と不遂眼と後び長く因果と引いて流暢とるありて物も
 地着よあるりしは毒永く身の数人のごとくは甚と稀ある淨
 有りて亦しつる地獄といつるハ極楽と悪人といつる地を
 取りて是れも人界よありて山嶽埋葎は地獄法あつたて地を
 走り相闘と多く強て強行して食と水むる禽獸よ生と地を
 多くハ獵師の獲物とあり皮と剥ぎ江人の身よつるれは馬具
 衣類とあり蹄皮とあり鞋履とあり肉とりつらてハ脂とそれ
 薪とせし船魚よむつし膳と刺きて医薬よ海つれば皮肉序くと
 して而も異は戦馬とありて殺戮と畜養と畜養と畜養と畜養と
 よもあつぬ命と殺死たりて海物とありても物相興の憂

一

二

と先れど其教とならばてハ情も愛生と云ふも其地獄
 あらばや任事多と拙て終て地獄の規矩と洋服一巳高
 王子別と云ふ一我舎のそとに一机も忽ちとして其と記
 雙眼と云ふきて其の地獄の事とて云れど奇怪くと福
 言して隣家の庭とて其の奇あると云ふり其世が玉帝
 乃今われはス一と返りてと云ふて目と瞑て逝はるる
 定業のや隣家の庭とて其の庭とて其の庭とて其の庭とて
 出雲のよ奇怪ありと云ふも彼教人の冤魂の云つる處
 つくればのまらるる法と云ふ

古今奇談英草紙第三卷終

